

景観工学の誕生と鈴木忠義・草稿

篠原 修

フェロー会員 工博 政策研究大学院大学教授
(〒106-8677 東京都港区六本木7-22-1, E-mail:shinohara@grips.ac.jp)

本論説は土木工学における景観工学の誕生を、その生みの親である鈴木忠義の生い立ちと人格、思想形成を第一の柱に、恩師、先輩等との交友関係を第二、時代背景を第三の柱として評伝の草稿として取りまとめたものである。

キーワード：景観工学, 鈴木忠義

1, 発表の意図

土木学会の常設調査・研究委員会の一つとして景観・デザイン委員会が設立されたのは1997(平成9)年のことだった。2001(平成13)年から景観・デザイン委員会デザイン賞の授賞制度が発足し、昨年(2005,平成17年)には第1回景観・デザイン研究発表会が開催された。勿論、景観・デザイン委員会以前から様々な活動は行われていた。その経緯は福井恒明：土木学会の景観・デザインに対する取組み(土木学会誌2002年2月号pp.32-33)に紹介されている。2003(平成15)年の国土交通省による「美しい国づくり政策大綱」の公表と、2004(平成16)年の「景観法」の公布、翌2005年の施行もあって景観は現在一つの隆盛の時代を迎えている。筆者が卒論で道路景観に取り組んでいた時代(1967,昭和42年)には、景観を専門とする大学教官は東京大学土木工学科助手の中村良夫一人のみであったことを想えば俗に言う隔世の感に堪えない。

この時点から数えても丁度40年の時間が流れ、中村良夫の景観の卒論第1号、「土木構造物の工業意匠的考察」(1963,昭和38年)を出発点とすれば、土木における景観研究は既に44年の歴史を持つことになる。ほぼ半世紀に近い。どのような経緯によって土木に景観という分野が生まれ、細々と受け継がれ、次第に発展期を迎え、更には今日の隆盛に到ったのか、その歴史を記述しておくことは創成期の景観研究者に課せられた責務であろうと考えるに到った。定年を迎えようとする前年(2005,平成17年)のことであった。

さて、景観工学の創始者は言わずと知れた鈴木忠義であり、創成期の景観研究を担ったのは、三田育雄

(林学)、中村良夫、村田隆裕、樋口忠彦等の弟子達で筆者はその末に連なる。しかし、鈴木忠義とその弟子達のみによって景観工学が生まれたわけではない。鈴木を景観に導いた鈴木忠義の恩師、先輩との交友関係が大きい。又鈴木忠義の人格、思想を形成した家庭・生活環境も見逃すことは出来ない。更には、その時代背景が意味を持つことは論を待たない。景観工学の誕生と発展を記述しようとするのは、特に創成期のそれは創始者、鈴木忠義の評伝を記述することでもある。今年の4月以来文献の収集と関係者及び本人にヒヤリングを行ってきた。歴史研究者の誰もが経験するように、これらの作業にはこれでよしとする終わりはない。いずれかの時点で区切りをつけなければならない。今回の発表会を一つのよい契機と見て、草稿としてまとめることとした。鈴木忠義の年譜を5期に分け、今回は表の如く3期までを扱う。観点は本人(その生い立ち、人格、思想形成)、人とのめぐり合せ(恩師、先輩、弟子等)、時代背景の3点とする。なお鈴木が開拓した分野は景観にとどまらず、観光・リゾート、計画の哲学(土木計画学)の3分野にわたっており、鈴木の本旨は観光にある。景観は鈴木からすれば傍流に過ぎない。この点は頭に留めておかねばならない。勿論、草稿と謳っていることで分かるように、今回の記述は極めて粗い、筋書きに近いものに過ぎない。

2, 生い立ちと人格・思想形成

鈴木は関東大震災の翌年、大正13年(1924)に鉄工場を経営する父の五男として向島に生まれた。この鉄

工場、経営者、五男、向島は鈴木の人格・思想形成を考える上でのキーワードであると考えている。鈴木は下町生まれの下町育ちと皆が考えているが、それは如何にも粗雑な理解である。下町とは江戸時代以来震災前までは神田や浅草、蔵前を指し、向島は隅田川の向こうの川向こうにすぎない。鈴木は生まれ育った向島立花は震災を期に移った町工場の移転先であった。いわゆる商家が並ぶ下町でもなく、大工や鳶が活躍するいなせな境界でもない。職工、工員が機械や旋盤の油にまみれて働く、町工場の町である。現在でもこの性格は基本的には変わっていない。鈴木はやや垢抜けない職人気質は、この生活環境、家庭によっている。又、経営者の家庭、五男も鈴木の人格、思想に大きな影響を与えたと見る。自立への志向と自由人、おおらかさである。鈴木は演習林の助手時代、「不用になったらいつでも言って下さい、コンサルタントをやりますから」と宣言しており、事実、東大土木、都市工時代、東工大に移ってからも構想計画、調査、診断などの仕事を学生とともに多数こなし、観光とリゾートのコンサルタントであるラック計画研究所の設立にも深く関与している。つまり大学や権威によって立つ古典的な学者ではなかった。又鉄工場経営者の五男という生まれも大きかった。小学校の同級生の内2人しか旧制中学に進学しなかったと鈴木が言うように、経済的には比較的裕福で、金銭面で将来が制約されることはなかった。演習林時代の給料をほとんどカメラ道楽につぎ込んでいたと言う証言もあり、進路を決めるに当たっても家族に気兼ねすることなく、自分一人が食っていければよいと考えていたのだと思う。自由に振る舞い、好きなことをやる、苦勞しながらもやりたいことをやる人間を支援する、という変わらない姿勢はこの育ちにあったのだろう。

府立七中（現墨田川高校）に入学した鈴木は東武亀戸線の東あずま駅から曳舟駅へ、電車通学することになる。この墨田川高校を訪ねてみると、そこは東向島三丁目の地で、なんと昔の玉の井である。鈴木が通学した昭和12年から17年と言えば、かの荷風もせつせと玉の井に通い、「墨東綺談」を著した時期を隔てることそう遠い話ではない。ここは工場の町ではなく、やや怪し気な雰囲気も漂う川向こうの三業地であったと思われる。一言付け加えておくと、江戸以来の百花園は府立七中のすぐ近くだが、鈴木の口から百花園の話が出たことはない。又、鈴木の東向島の青春がどんなものであったか、本人の口から聞いたこともない。

3. 弘前へ

府立七中を昭和17年3月に卒業した鈴木は一浪の後、旧制弘前高校理科甲類に入学する。既に太平洋戦争敗色の臭いがする昭和18（1943）年4月である。何故弘前高校にという問いに対する鈴木は答、「だってボヤボヤしていればしっばられ（引っぱられ）ちゃうからさ」。徴兵されることへの恐怖である。ちなみに弘前高校の同級生の内、地元出身は一人で、ほとんどが東京出身者であったと言う。又、理科を選んだのも鉄工場育ちということがあったにせよ「しっばられにくい」為の選択だったのだろう。

弘前時代の思い出として何回か聞かされたのは「樹が家よりも高くて、これが人間の住む本当の環境だと思った」のみであり、初めて東京を離れた弘前で生活が鈴木の人格、思想に大きな影響を与えたとはいえない。但し弘前では軍人と共に旧制高校生は大切にされたと言う。勤勞奉仕で農家に行っても、どうせ何も出来ないしと、お客さん扱いだったと言う。昭和20年3月、1年繰り上げ卒業で自宅に戻る。

4. 東京大学第2工学部

東大入学の時点で重要なことは次の2点である。第一は勿論土木を選んだことである。長兄が機械に進んでいて徴兵で中国大陸に行っていた。その長兄の言によれば軍隊では機械より土木の方が大切にされていたのだと言う。又、この時期になると敗色濃厚であるとは皆薄々感じていた筈で、勝つにせよ負けるにせよ戦後は国土の復興が不可欠で、それで土木ということにしたのだとも言う。第二は鈴木が第2工学部の土木に配属されたことである。私学などにあった夜間の第2とは異なり、東大の第2工学部は歴とした昼間の学部で、戦争に備えてエンジニア増強養成の為に新設された学部であった。学生は本郷、西千葉（第2工学部所在地）と成績順に交互に機械的に割り振られた。

第2工学部の教官には社会の第一線で活躍中のエンジニアが充てられた。それ故に理論の本郷、実学の西千葉と呼ばれたと言う。自由の気風が強かったとも言う。この第2工学部への配属は大きかった。理屈よりも実践を重んじる鉄工場の職人達に囲まれて育った鈴木は性格にピタリと波長の合う学風だったに違いない。ここで鈴木の将来の進路に決定的な影響を及ぼす恩師と巡り合うことになる。それは常勤の土木の先生ではなく、非常勤の林学の先生だった。「橋梁美学」を著した加藤誠平である。加藤は東大の林学を出て内務省に勤務し、大学に戻っていた。専門は林道や索道、橋梁を扱う森林土木（森林利用学）だった。加藤は構造力学の勉強の為に土木の山口昇に師事し、上高地の河

童橋（吊橋）を設計する。「橋梁美学」はその経験を踏まえて書かれたものである。

鈴木は同じく非常勤で来ていた土木の先輩、石川栄耀（都市計画学会の実質的創始者、当時東京都都市計画課長）等の話にも影響を受けたが、加藤の話に同感する所が最も多かったと言う。鈴木は写真クラブに属していた。鈴木の写真は年期が入っていて、長兄の影響で小学生の時からカメラを持っていた。筆者が学生の頃でも旅行には必ず2台のカメラを持ち歩いていた。

1台は口頭発表や講演に使うカラーのポジ、もう1台は著書や雑誌に使うモノクロのプリント用である。いずれも35mmのニコンであったと思うが、6×7の大判やライカ等も持っていた筈である。同級生には鉄道から後に鹿島建設の社長、会長になる石川六郎がいて、六チャンとは親しかったと言う。

胸の病で1年留年した鈴木は「道路計画」で卒論を書いて、昭和24年3月東大を卒業する。我々の仲間内に一般に流布していた話では、元々日本庭園的なことをやりたかったのだが、お国の為に土木に進み、卒業を機に元々やりたかった日本庭園の方向（林学）に進んだのだ、と言う。しかしそれは真実ではなかった。卒業してそのまま土木の道、つまり内務省や鉄道、あるいは建設会社に行けば「殺されちゃうからさ」、と鈴木は語る。健康、体力ともに当時の鈴木には自信が持てなかったのである。

5. 演習林の日々

鈴木は加藤を頼って農学部林学科の大学院へ進学しようと考えた。又、加藤の紹介で厚生省の田村剛（日本の国立公園の父、林学出身）を訪ね、国立公園関連の就職もお願いしたと言う。田村は大学院で勉強をしてからでも遅くないと答え、それで再び加藤の元へ行くと、同じ勉強するなら給料をもらいながらやればよい、ということで鈴木は演習林の日雇いに採用されることになる。9月には正式に助手となり、ここに12年余りの鈴木演習林の日々が始まることになった。

鈴木演習林の当時の関心の中心は観光であり、とりわけ観光道路、観光・レクリエーション開発論だった。これには鈴木演習林の個人的な履歴、時代背景、恩師加藤の3つの要因がその背景となっている。鈴木が小学生時代からのカメラ少年だったことは既に述べた。まさか小学生が婦人科になるわけには行かないから、当然写す対象は風景や列車などとなる。木村伊兵衛の如き社会派の写真も子供には無理である。従ってカメラ少年鈴木が旅行好きとなるのは必然の成り行きで、更には景色の良い所を求めての観光となるのである。鈴木演習林の観光、

景観研究の原点にはカメラがある。この原点に関しては同じ景観研究者にも相違があり、中村良夫は日本庭園（本人の弁）、樋口忠彦は建築あるいは田園風景（想像）、筆者は文系、計画志向である。

次に当時の時代背景が大きい。敗戦から昭和20年代の日本の目標像は軍隊を持たない平和国家であり、スイスのような永世中立国が理想の国家像となっていた（これは勿論当時の日本人の幻想である。スイスは徴兵制による軍隊を持っていた。今も）。又、観光立国という命題が真剣に議論され（つまり工業力再興は当面は不可能であると考えられていた）、実際にも国際観光による外貨獲得を狙った国立公園の追加指定が行われたのである。昭和21年の風景とパールの伊勢志摩、昭和25年の秩父多摩、裏磐梯という具合に。世は挙げて観光に傾斜していた。観光は国土計画の重要な柱だったのである。

その為には人々に自然の大風景を提供する観光道路の開設が不可欠だった。昭和20年代から30年代にかけて全国各地に観光道路の開発が行われる。伊豆スカイライン、天草パールライン、阿蘇の山並みハイウェイ等々。昭和31年に設立された道路公団においても、名神、東名などの高速道路建設が本格化する以前の主要業務は、これらの自動車専用の観光道路の建設であった。この時代的潮流に恩師加藤の専門がピタリと重なる。森林利用学が対象としてきた山岳（森林）の林道の計画、設計である。それはまさに観光地の道路の計画、設計に重なる。鈴木は早くも、加藤との共著の形をとってはいるが、昭和26年には「観光道路」を執筆、出版する。研究、調査、資料収集は、田村、加藤などのカバン持ちで廻った全国各地の観光診断の出張であり、得意のカメラを駆使した自前の写真であり、潤沢な予算を持つ演習林の金で購入した観光先進国の洋書であった。

鈴木は「観光道路」を始めとする当時の著書を筆者に示しながら、これはぼくの「フォトエッセイ」だよと言う。好例悪例を写真で示し、簡潔なコメントを添え、紙面のレイアウトも自分でやったのだ。ここに至って「道楽」でやっていたカメラが、観光と言う新たな専門分野の開拓に生きることになった。

演習林時代の鈴木演習林の生活は、傍から見ている限りにおいては随分と暢気なものだったらしい。助手であるにもかかわらず観光やリゾートを専門にする上司の教授、助教授はおらず、調査研究費は潤沢だった。公務と言えば役所から非常勤で教えに来る田村先生等の世話ぐらいだったのでないかと、農学部時代の教え子、三田（林学、昭和37年卒）は言う。その気さくな性格で、忠さん忠さんと職員に親しまれ、よく歌舞伎他の観劇会を企画していたと言う。又、そのセミプロ級の

写真撮影技術を演習林の職員に講習していたとも言う。これは本人の談である。以上に素描したように演習林時代の鈴木を中心テーマは観光の診断と構想計画の立案あるいはレクリエーション行動の分析である。しかし、出身母体である土木の、道路との関係が出来始めたのもこの時期である。

昭和31年に設立された道路公団は名神、東名の建設に向けて、昭和33年には線形設計の指導にドルシュを招聘し、名神の起工式を行う。この高速走行を可能にする線形設計が高速道路の計画、設計の主流である。しかしそれとともに走行を快適にする道路植栽、ドライバーに休息を与える休憩施設（サービスエリア）も不可決の要素となる。いずれも我が国のそれまでの国道にはなかった要素である。ここに道路公団は観光道路研究（唯一の）蓄積を持つ鈴木を呼ぶことになる。

6. 土木工学科専任講師

昭和36年7月、鈴木は長く居た演習林に別れを告げ、土木工学科に専任講師として着任する。母学科の第2工学部（この時期には付属の生産技術研究所となっていた）ではなく、第1工学部の本郷である。この種のスカウトとも言うべき人事のディテールにはよく分からない点が多い。当時の、この人事の当事者だった土木の八十島義之助、都市工の高山栄華等が何らの記録も残していないからである。しかし、大筋の所は分かる。それを筆者の推測を交えて以下に述べる。何故にこの人事が重要であったかと言うと、鈴木本人が存在しなければ勿論今日の景観はないわけだが、この人事によって鈴木が土木に戻らなければ、やはり今日の土木系の景観はなかったと言えるからだ。

事の始まりは東大に都市工学科を新設しようとする動きだった。従来からの都市づくりにかかわる専門は土木、建築、園芸（造園）の3分野だったが、いずれにおいても都市を扱う技術者は各分野においてむしろ傍流だった。土木では河川、鉄道が、建築においては勿論単体の建築が主流を占めていた（現在も同様である）。本格化する都市の時代に向けて都市専門のエンジニアを養成しようとするのが都市工新設の目的であった。建築からは高山（都市計画）、丹下健三（都市設計）、土木からは八十島（都市交通）が出る。いずれもが現役であるにもかかわらず「名誉教授」と陰では呼ばれていた大物中心の布陣である。ではその「名誉教授」の元で実質的に動く人材に誰を当てるか、それが問題だった。高山の下には川上秀光、丹下の下には大谷幸夫、この両名はともに直系の弟子である。八十島にはそれが居なかった。何故なら土木の交通の本流

は鉄道工学で、八十島自身は交通計画にシフトしつつあったが、計画系の直系の弟子は居なかったのだ。ここで学問の系統とは全く別の人間の交友関係が生きることになる。

鈴木が師事した林学に加藤は東大運動会のスキー山岳部の部長だった。高山はサッカー部O. B. のボスであり、八十島はアイスホッケー部O. B. で運動会の総務担当だった。加藤がその下で構造力学を勉強した山口もスキー山岳部だった。八十島は鈴木の子供でもなく、面識すらなかった関係である（八十島は第1工学部の教授、鈴木は第2工学部の学生）。しかし運動会仲間の加藤を通じて、「お宅の卒業生が僕の所において、観光や道路のことをやっていますよ」と言われ、鈴木という変わった後輩がいることを知ったのである。下を見ても該当する直系の弟子が居ない。高山の「都市工には造園的な専門も必要である」という言。自分がないバワフルな力が新設学科には必要だと考えた八十島の判断。これらの要因が鈴木忠義、土木工学科専任講師となって実現したのだと思われる。勿論都市工への移籍という予定の元で、鈴木の土木への移動は急だった。当時林学科の学生だった三田によれば、ある日急にあつげらかと「今度僕は土木に行くことになったからね」と宣言したという。

ちなみに鈴木の子供論文は「海水浴場の離散集合」という人間の行動を分析したもので、主査は加藤である。八十島には土木でといわれたが、「だって土木じゃ審査できる奴が居ないよ」と鈴木自身が言う理由だった。

鈴木は土木に移ってから昭和37年卒の院生中川三郎をお供に、国道1号線のドライブインの現地調査を行い、「自動車道路の休泊施設」をまとめる。前述の高速道路のサービスエリア計画の為の調査研究だった。中川に聞いた当時の鈴木の様子と自信の程を示す弁。「あいつらは群れている。我々にははぐれ者、ヤクザだ」。あいつらとは当時の土木の教官連を指す。実学的な第2工学部出身にして、一人で演習林時代に観光という分野を切り拓いてきたという自負。鈴木によく聞かされた「古典土木」という言葉に込められた思いが、つまり象牙の塔に閉じ籠もって仲間意識ばかり強く、何ら新しいものを生み出さない教官達への一種の軽蔑が「あいつらは群れている」という表現に表れたのである。

しかしこの時点に至ってもなお、鈴木が開拓した第二の分野である景観研究への志向は顕在化していない。観光を専門にすれば、その場所が自然にせよ都市であるにせよ、美しい風景が不可欠の要素であることに気づかない筈はない。ましてや観光道路をテーマにすれば、シークエンス景観を中心とする景観を研究しない

わけにはいかない。事実、後者のシーケンス景観は初期景観研究の中心テーマとなって、後日、磐梯スカイラインの計画や樋口の修論、村田の学位論文となるのだが、鈴木は景観をやらねばという思いに応える人材が居なかったのである。

鈴木は景観工学への思いを顕在化させた人物が中村良夫だった。中村は日本庭園に関心を持ちつつ昭和36年4月に土木工学科へ進学した（この時点では鈴木は土木に居ない）。交通研に入って「日本庭園の様なことで卒論を」と指導教官の八十島に相談した所、鈴木を紹介されたのだと言う。つまり鈴木が土木の教官に居ることを知って、そのもとで勉強しようと土木に進学したわけではなかった。やや細かいことを言うと本郷の専門への進学の振り分けは2年の秋に決まるから、この時点（昭和35年秋）では中村は鈴木が存在すら知らなかったのである。昭和38年3月の中村の卒論「土木構造物の工業意匠的考察」が土木における景観の卒論の第1号となった（後にこの卒論は「土木空間の造形」技報堂として出版される）。

何とも綱渡り的なめぐり合せだった。鈴木が戦時下の旧制高校生ではなく、又東大在学中に胸を患うことがなければ、土木工学科専任講師鈴木はどうなっていたかわからない。又中村の方も2浪せずに現役で東大に入っていれば卒業は昭和36年3月になっていた筈だから、鈴木とはすれ違いになる筈だった（鈴木は着任は昭和36年7月）。この偶然のめぐり合いによって景観工学はスタートしたのである。

7. 新設都市工学科へ

昭和38年11月、鈴木は予定通り都市工へ移り、昭和39年に都市工が正式に発足する。しかし、中村の卒論に始まった景観研究は交通研の「みそっかす」として残り、村田（昭和40年卒）、小笠原常資、田村幸久（昭和41年卒）、樋口（昭和42年卒）、篠原（昭和43年卒）、小柳武和（昭和46年卒）、窪田陽一（昭和50年卒）と細々と受け継がれていく。道路公団に就職した中村を昭和40年4月に鈴木が土木へ呼び戻して、それが可能になった。この人事には勿論交通研教授八十島に先見性があったからだが、当時の土木教室のボス最上武雄（土質力学、応用力学）の支援も大きかったと言う。鈴木の言う古典土木の大御所にも炯眼の人物は存在したのである。

鈴木は1番弟子中村の助手就任に「景観は君に任せよ」という気持ちだったのだろう。都市工に移り、東工大に行ってから、本業の観光に戻り、又第3の分野である土木計画学（計画の哲学）に力を注ぎ、景

観研究に直接係わることはなかった。

最後に景観工学のその後をざっと述べておくと、中村の卒論（これはデザイン論、意味論である）に始まった景観研究は、道路景観研究が続き、篠原の修論を切っ掛けとして、より一般化した地形景観、視覚関係分析となり、樋口の学位論文（「景観の構造」技報堂として出版される）で一応の完成をみる。その後研究はイメージ論、仮想行動論、記号論、アーバンデザイン論、デザイン史などと間口を広げ今日に至る。又昭和50年代に中村の太田川によって始められたデザイン実践への参画は、昭和60年代から急速な展開をみせ、現在では研究と並ぶ景観分野のもう一本の大きな柱となっている。この辺の鈴木年譜の東工大時代以降の論述については他日を期そうと思う。

参考文献

- 1) 鈴木忠義先生の古稀をお祝いする会編：「鈴木忠義先生の古稀を祝う」、1995. 9
- 2) 今岡和彦：「東京大学第2工学部」講談社、1987
- 3) ヒヤリング対象者（順不同、敬称略）：鈴木忠義、中村良夫、中川三朗、花岡利幸、原重一、三田育雄、河村忠男、松崎喬、森地茂

鈴木忠義年譜(1)T.13~S.24(1924~1949)[学生時代] (2)~S.36.6(1961.6)[演習林時代、12年3ヶ月]

学歴・職歴、○人物	論文、著作、報告書等	社会・観光・景観法令	その他
T.13(1924).9.20 ○M.23(1890)本多静六 林学科卒業 ○T.3(1914)山口昇 土木工学科卒業 ○T.4(1915)田村剛 林学科卒業(厚生省) ○T.6(1917)石川栄耀 土木工学科卒業 ○T.11(1922)岸田日出刀 建築学科卒業 父伝吉、母チヨ(千代)の五男として向島に生まれる ○T.14(1925)菊池明 土木工学科卒業 ○S.4(1929)加藤誠平 林学科卒業(森林利用) ○S.4(1934)高山英華 建築学科卒業		T.8(1919) 史蹟名勝天然記念物法公布 T.12(1923).9.1 関東大震災、 概成S.5(1930)	
S.6.4(1931、7歳) 東京市立第一音孺小学校入学 ○S.9(1934)最上武雄 土木工学科卒業		S.6(1931)満州事変 S.6(1931)国立公園法公布	
S11.1(1936、11歳) 東京市立中川小学校へ転校 ○S.11(1925)片平信貴 土木工学科卒業		S.9(1934)国立公園第一次指定 (阿寒、大雪山、日光、瀬戸内海等)	
S.12.3(1937、12歳) 中川小学校卒業		S.11(1936)2.26事件 S.11(1936)日支事変	
S.12.4(1937、12歳) 府立7中入学(現墨田川高校) ○S.16(1941)八十島義之助 土木工学科卒業 (繰上げ、本来はS.17.3)			
S.17.3(1942、18歳) 府立7中卒業 1浪	○S.12(1937)加藤誠平「橋梁美学」	S.16.12.8(1941)太平洋戦争	
S.18.4(1943、19歳) 弘前高校理科甲類入学 弘前市北沢寮			
S.20.3(1945、21歳) 同卒業(1年繰上げ) 自宅へ			
S.20.4(1945、21歳) 第2工学部土木工学科入学 留年(3年、結核) ・写真クラブ ○S.21(1946)大塚勝美 土木工学科卒業		S.20.8.15(1945)敗戦 S.21(1946)観光診断(日観連)	
S.24.3(1949、25歳) 同卒業「道路計画」		S.21(1946)国立公園指定(伊勢志摩)	
S.24.4(1949、25歳) 林学科演習林日雇い		S.25(1950)国立公園指定 (磐梯朝日、秩父多摩)	
S.25.9(1950、26歳) 同助手 ○S.26(1951)塩田敏志 林学科卒業 前野淳一郎、日下部甲太郎 ○S.28(1953)岩間滋 土木工学科卒業	S.26.8(1951)「観光道路」(加藤誠平と) S.28.9(1953)「海水浴場の計画」	S.25(1950)朝鮮戦争 S.28(1953)道路特会 S.29(1954)第一次道路整備5年計画 S.31(1956)日本道路公団設立 S.32(1957)高速自動車国道法公布、施行	
正子と結婚(旧姓渡辺)	S.31.9(1956)レクリエーションエリアにおける人々の集散離合(1) S.32(1957)現代人の観光事情 S.33.3(1958)茨城県観光診断 S.33.9(1958)レクリエーションエリアにおける人々の集散離合(2) S.35.2(1960)土木計画と観光 S.36.1(1961)レクリエーションエリアにおける人々の集散離合(3) S.36.3(1961)「観光開発をどう考えるか」	S.33(1958)ドルシュ来日、名神起工式 S.35(1960)名神山科初開通	

鈴木忠義年譜(3)S.36.7~S.41.6(1961~1966)[東大・土木、都市工時代、5年]

学歴・職歴、○人物	論文、著作、報告書等	社会・観光・景観法令	その他
S.36.7(1961、37歳) 土木工学科専任講師(教授 八十島) ○S.36.7(1961)塩田敏志 林学科助手(～ S.50.4)	S.36.8(1961)路傍植栽の計画と取り扱い		
S.37.2(1962、38歳) 農学博士「海水浴場の集合離散」主査加藤 ○S.37(1962)三田育雄 林学科卒業「道路の植栽 計画」 ○S.37(1962)中川三朗 卒業 土質研 ○S.37.4中村良夫 交通研 ○S.38.3中村卒業「土木構造物の工業意匠的考 察」 ○S.38.3(1963)花岡利幸 山梨大土木工学科卒業 「弾性床上の理論」 ○S.38.3(1963)原重一 北大農学科卒業「芝生の 育成」			
S.38.4(1963、39歳) 土木工学科助教授(農学部大学院兼任) ○S.38.4(1963)原 土木研究生	S.38.10(1963)自動車道路の休泊施設	S.38(1962)東名着工(1969開通)	
S.38.11(1963、39歳) 都市工学科助教授、観光レクリエーション研究室 (教授 下水道講座 徳平淳) ○S.39.4(1964)原 都市工職員(～S.42.3) ○S.39.4(1964)村田隆裕 交通研 ○S.40.3(1965)村田卒業 ○S.40.4(1965)渡辺貴介 都市工鈴木研 ○S.40.4(1965)中村良夫 土木助手 ○S.41.3(1966)渡辺卒業「観光誘致圏」 ○S.41.3(1966)森地茂 土木工学科卒業 ○S.41.1(1966)樋口忠彦 交通研	S.39(1964)「土木技術100年の歩み」 S.40.3(1965)「道路と景観」(訳) S.40.4(1965)道路と景観 S.41(1966)観光開発の方向を語る S.41(1966)観光開発の意味と観光の原理(1,2,3) S.41(1966)下関市観光開発の構想計画	S.39(1964).都市工学科発足	